

No Foreign Literature;
No Life.



illustration by Ito Yukiho

新潮クレスト・ブックス 2025-2026

FREE
ご自由
にお取り
ください

[インタビュー]

ネージュ・シンノ

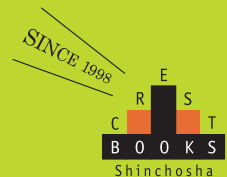
「実は多くの人が共有している
子どものときに受けた暴力、悲しみ、そして孤独。」

カテジナ・トゥチコヴァー 「『女神』たちは本当に生きていた。」

[近刊紹介] ヴェロニック・オヴァルデ

ただいま翻訳中! これから出るクレスト・ブックス

新潮クレスト・ブックス カタログ 1998-2025



実は多くの人が 共有している 子どものときに受けた暴力、 悲しみ、そして孤独。

幼少期の実体験を分析することで、
身近に存在する巨悪からジェノサイドまで、
「悪」の本質を論じることに成功した唯一無二の書『悲しき虎』。
本国フランスで30万部を超える大ベストセラーとなったが、その著者が
創作の発端やタイトルに込めた想い、
社会の変化について語る。

ネージュ・シンノ

interview with Neige Sinno

飛幡祐規 聞き手、翻訳

interview and translated by Takahata Yuki

子ども時代に継父から受けた性的虐待とレイプについて、手記や自伝フィクションではない独創的な形で綴ったネージュ・シンノの『悲しき虎』は、二〇二三年に出版されたフランスの新刊書でもっとも注目され、高い評価を受けた作品である。著者は「語るに忍びない」語っても社会が聞く耳を持たないテーマを、文学、哲学、文化人類学、心理学、精神医学などさまざまな視点から考察する。また、自身自身と対話しつつ、読者にも問いかける語り口によって、思考を深めて認識を分かち合う道ゆきに読者を誘う。

シンノは大学の交換教員プログラムでアメリカ合衆国のミシガンに滞在中、メキシコに何度も旅を重ねるようになった。二〇〇六年以降はメキシコに移住し、パートナーと娘と共に現在も暮らす。二〇〇七年にデビュー作（短編集）を刊行したシンノは、『悲しき虎』で一躍脚光を浴びた。

書くことが被害者にとってセラピーになる場合もあるが、著者はそれとは異なる願望があつてこの本を書いた。告訴から二〇年を経て書く決意に至ったのはなぜなのか、『悲しき虎』というタイトルにはどんな思いが込められているのか、#MeToo運動などにより多くの被害者が声をあげるようになってきた今、この本を通してどんなことを触発したいのか——新作『La Realidad（現実）』の刊行に際して、この春パリで講演や読者との出会いの時間を持ったシンノに語ってもらった。

——『悲しき虎』はフランスでは二年を経ずに三〇万部を記録し、翻訳権も三〇か国以上に売れました。



フェミナ賞、高校生が選ぶゴンクール賞、ル・モンド文学賞などたくさんの文学賞を受賞されています。そのことに對して、どう思われていますか。これはどの反響を予想されていたでしょうか。

フランスやたくさんの国でこの本が評価されたことは嬉しく、光榮です。本がどのように受けとめられるか、前もってばかりません。それに私は、子どもへの暴力について語ることに對して、社会の中に抵抗があるのを承知していました。とても悲痛なテーマだからです。でも私は、作品の中に自分のエネルギーと怒り、知性のすべてを注ぎ込みました。それが作品に特殊な力を与えたようで、性暴力に対する告発が広がる社会の激変に私自身も参加できているという印象を持ちました。

——タイトルの『悲しき虎』という言葉にはどんな思いが込められているのでしょうか。日本では、虎は強くて憧れの対象になることもある動物です。英文科出身でない一般の読者には、タイトルのもとになっているウィリアム・ブレイクの有名な「虎」の詩は、それほどなじみがないのですが。

このタイトルは私にとって多くの響きを持ち、さまざまな意味とシンボルを内包しています。最も顕著な象徴は暴力です。虎のように恐ろしく、惹きつける力を持つ加害者／捕食者は、被害者／獲物を絶対的に支配します。絶対的な力を持つ虎（捕食者）に人は感嘆します。一方、私は逃げられる可能性がない獲物でした。この作品で私は、両者のあいだの複雑な関係を示し、言語の力で観点を変えることによって、暴力や

この作品の特殊な性質と、証言というジャンルの難しさの認識から、読者に語りかける形をとりました。過去に自分に起きたことについて、現在の「私」がここで問いかけています、と読者の意識に語りかけているのです。そして読者に、あなたが私の立場ならどうしたかと尋ねます——自分のアプローチの争点を示し、このテーマを考えるとときに出会う難しさや行き詰まりを読者が理解してくれるように努めました。この形態と構成によって、読者は小説を読むときのように過去の話に引き込まれたりせず、その話についてのさまざまな議論、考察や複数の側面に常に気を配るようになります。それによって激情や悲憤感から距離を置くことになるかどうかはわかりませんが、伝統的な物語の形態に對しては距離が生じます。フィクションにおいては、読者が登場人物に自己を同一化して物語に浸る傾向がありますが、この作品ではそうはなりません。読者は少し離れたところで、語られている話の能動的な観察者になります。というのも、読者が話の観察者にとどまるのではなく、理解してほしいと思ったからです。

——本書にたくさん文学作品が引用されているのも同様のアプローチからですか？

作品をたくさん引用したのは、私が小さい頃からずっと本の虫だったからで、映画好きだったらもっとたくさん映画を引用し、歴史にもっと詳しくったら歴史的な視点を使ったでしょう。いろいろなものを参照することで、思考を深めていくプロセスを私は示したかったのだ

権力者に価値を与えることの問題点を読者に感じてほしいと思いました。論理と知性を働かせると、性的虐待者、つまり権力を濫用して他者を貶める人物がいかに惨めで情けない人間か、「哀れなやつ」、「悲しき虎」であるかが見えにくいです。

しかし、このタイトルには他にもたくさんの虎、さまざまな矛盾と逆説的な要素が結集されています。怒り、悲しみ、力強さと弱さ、喜びとメランコリーなど、この作品全体を貫いて共存する感情のすべてを読者が感じられるように。

語り手の「私」は
絶えず自らに問いかかけ、
読者と対話する。

——自分の性的虐待について、あるとき書く決心をされたのはどんなきっかけからでしょうか。また、それまで一人称を使わなかったのにあえて一人称で書くことにしたのはなぜですか。

性的虐待を語るタブーを破ることは容易ではありませんが、ひとたび一步を踏み出すと、解放的な力に支えられました。きっかけは、メキシコのチアパスでサパティスタ民族解放軍の社会運動の女性たちが主催した国際集会、への参加です。暴力が遍在するメキシコでのフェミニストの反逆という、決定的な瞬間を私は体験しました。世界各地から集まった大勢の女性たち

す。そして、そのプロセスの自由さに伴う喜びも。思考はひとりでに形成されるのではなく、まわりにあるものすべてをいろいろ取り入れて練られます。それは、文化を生源として利用するやり方です。自分が読んだ本を私は別の目的に使用して、再び生命を与えていると言えます。私はまた、西洋の伝統的な複数の文芸思潮や流派から受けたインスピレーションを自由に使っています。

——#MeToo運動など、女性や被害者が声をあげることができるようになった社会の変化をどう見ていらっしやいますか。フランスでも告発や裁判が増えていますが、性暴力撤廃への政治的な意思はひどく不十分で、「レイブ文化」がいまだ維持されている面があります。なぜこれほど社会の「否認」は強力なのでしょう。そして、どうしたらそんな社会を変えられるとお考えでしょうか。

社会的な「否認」は、家庭内から政界に至る



ネージュ・シンノ『悲しき虎』
飛幡祐規訳 2025年8月刊行予定

は、自分が受けた性暴力を語りました。私はそこで、子どもへの性的虐待がものすごく蔓延した現象であり、あらゆる国、文化、階層の人に共通の不幸なのだと思えました。子どもがときに受けた暴力と悲しみのせいで自分の中で感じていた孤独は、多くの人が共有しているのだと、頭だけでなく身体、自己の存在全部で深く理解したのです。この認識から、私は一人称で自分の体験を書く決心をしました。その一人称は個人的な「私」ではなく、共通の集団の悲劇が反映されたものののです。

——どのようにして自伝でも自伝フィクションでもないノンフィクションを構築したのですか？

この作品が従来のもものと異なるのは、話を語る前に思考のプロセスをたどっていることだと思います。もちろん、子どものときにレイプされ、そのトラウマ体験の影響を一生持ち続ける人物の複雑な話が語られています。しかし、それを時系列に沿って線的にではなく、暴力というテーマに對面するときに私の頭に浮かぶ思考の紆余曲折にしたがって語っています。記憶に考察、問いかけ、聞いたり読んだりした物語が重なり、個人的な話とずっと広い文脈の中での他の文学作品、哲学的、歴史的な物語が行き来する形態です。

——語り手の「私」は絶えず自分に問いかけていますが、読者とのあいだにもある種の対話があるように感じます。そうすることによって、激情や悲憤感から距離を置いて、事実と複雑な感情をなるべく正確に描こうとされたのでしょうか？

すべてのレベルに及んでいて、その理由はたくさんあると思います。主要な原因の一つは、あらゆる部門で不均衡な力関係が存在し、権力を持つ強者たちは、罰せられずに他の人々を自分の好きなように使えると思っていることです。この状況を変えるには、何世紀も前から私たちが自明のものとしてきた生き方や習慣の多くを変えなくてはならないでしょう。でも、やってみたらいいのではないのでしょうか。それには、子ども時代を最も重要なものとして優先的に考えることが大切だと思います。子ども時代をあらゆる人間の生の中核、未来を創造する「るつぽ」と見ることで、世界を変えるのです。

*メキシコで最も貧しい州とされるチアパス州で、先住民の権利、農民の生活向上と自治を掲げるサパティスタ民族解放軍が二〇一九年十二月末に主催した、二回目の「闘う女性たちの国際集会」（女性だけの大規模な集まり）。

Neige Sinno

1977年、フランスの南アルプス地方オート＝アルプ県生まれ。フランスとアメリカの大学で学び、博士課程ではレイモンド・カーヴァー、リチャード・フォード、トバイアス・ウルフについて研究。2006年からメキシコに在住。作家、翻訳家（英語、スペイン語）。これまで小説『La vie des rats（鼠の人生）』、『Le Camion（トラック）』、『La Realidad（現実）』を発表。本書で、フェミナ賞、高校生が選ぶゴンクール賞、ル・モンド文学賞、ストレーガ・エウロペオ賞など多数受賞。

Kateřina Tučková

1980年生まれ。
美術史家・評論家・劇作家でもある。
2006年に小説家としてデビュー。
2012年に刊行された本作
(原題は「ジートコヴァーの女神たち」)で
ヨゼフ・シュクヴォレツキー賞、
マグネツァ・リテラ読者賞、
「チェコの本」読者大賞などを受賞。
チェコでベストセラーとなり、
約20の言語に翻訳されている。

「朗読会に参加した地元の人々はあなたの本を読んでいたか？」
そう思います。地元の人たちにとって、女神は大きなテーマです。ジートコヴァーの人口は百八十人ですが、今回の朗読会には百四十人が来てくれました。みんな、シュテフィナ(訳注:「最後の女神」とされ、作中にも登場するイルマ・ガブル・ヘロヴァーの娘)の葬儀に参列し、その流れで来てくれたのです。
——生前のシュテフィナと話をしたことはありませんか？
連絡を取ろうとしましたが、彼女は乗り気ではありませんでした。シュテフィナは八十歳を越えており、最後は不幸な死に方でした。「神の術」を頼りにやってきた男性に殴り殺されたんです。しかもその葬儀の最中、突然停電になりました。「女神」はそうやすやすと墓に入らないってことが証明されたのです。それまで彼女のことを疑っていた地元の人たちも、その時ばかりはあれは女神の仕業だねって頷いていました。シュテフィナが神の術を使うようになったのはビロード革命(訳注:一九八九年、チェコスロヴァキアで共産主義体制が崩壊した)以後のことだったので、あれは女神じゃない、単なる金儲けでやってるだけだって疑う人が多かったんです。

interview

photograph by David Konečný

「女神」たちは本当に生きていた。

歴史に埋もれながらも生き続けた
「女神」たちの存在を描いた本作がチェコでベストセラーに。
不思議な力で人々に影響を及ぼし続けた
彼女たちを追いかけた日々を語る。

カテジナ・トゥチコヴァー

interview with Kateřina Tučková

マルツェラ・ペハーチコヴァー 聞き手

阿部賢一 翻訳

interview by Marcela Pecháčková
translated by Abe Kenichi

カテジナ・トゥチコヴァー
『ジートコヴァーの最後の女神たち』
阿部賢一・豊島美波訳
2025年9月刊行予定
(書影はチェコ語版)



photograph by Tadea Mlsuren

——ジートコヴァーの人たちと会うのに不安はありませんでしたか？ 作中では、必ずしもいいことがかりが書かれているわけではないの。
たしかに不安はありました。現地の人たちがら見れば、あまり評判のよくないエピソードも盛り込んだからです。でも最終的には私をあたたくく受け入れてくれました。ですが、アルコールをよく飲むこと、識字率の低いこと、そして同性愛のことが描かれている点はあまり気に入らなかつたようです。おもしろいことに、識字率の話をすると、かつてのこの人たち、とりわけ女神は賢いわけではなかつたから、そのことはかまわないって口を揃えて言うんです。でもアルコールに関しては見解が異なつて、自分たちのところではそんなに飲まないってみんな主張していました。とはいえ、私が訪問すると、どこの家でも蒸留酒で歓待するんです。朗読会ではいろいろな話を耳にして、ある人が「ボホウシユはさんざん飲んだくれて死んでいのが発見されたけど、今はもうそんなことないよ」と言つたかと思うと、別の人が「そうだな、ロイザが車に轢かれたのは道路で寝ていたからだな……それも、だいたい前の話だ」という感じなんです。モラフスケー・コパニツェ(訳注:ジートコヴァーも含む地域の総称)での別のイベントの時には、ある男性が死んでいるのか酔っぱらっているのかわからないという話で四、五十分議論していました。
——でも、あなたはアルコールに対して嫌悪感をお持ちではないですよね？

ええ、むしろその反対です。それはこの土地の一部になっていますし、自家製の蒸留酒は白カルパチア地方〔訳注：チェコ東部、スロヴァキア西部、オーストリア北東部にまたがる地域〕で昔から続く伝統です。一方、女性の同性愛が私の小説に描かれていることには不満だったようです。コパニツェではそんなことはぜったいにない、とある男性は気分を害して言っていました。ここはカトリックが強い地域で、異性愛以外の関係があることに思いが至らないのです。同性愛は世界で四％の少数派とされていますが、コパニツェではゼロだと。朗読会で感じた大きな驚きでした。

——白カルパチアで女神の魔法が再び使われるようになるのでしょうか？

わかりません。ある女性はカード占いをしており、別の女性は蠟をつかって将来を占っていますが、二人の母親は、葉草の効能について知識がありませんし、呪文を唱えられるような女神でもありませんでしたから。

——女神には、なにがしかの力があると信じていますか？

うーん……半分ぐらいかな。私が調査をしていた時「あの人たち」と特別な体験をしました。私が病氣にかかって、なかなか回復しなかったことがありました。当時は女神の生活を科学的に調べていて、彼女たちの力をあまり信じていなかった。でもいろいろな人に尋ねると、女神の影響をどれだけ受けたか、暗示的にですが話してくれました。彼らは女神の力を信じていま

の人の名前が付されているかもしれません。

——秘密警察が用いた言葉遣いや言い回しも出てきて、本物らしさが高いように思いました。私は実在の資料かと思っていました。

……そうではありませんが、作中でスルメナに対して行われる電気ショック療法、この資料の言葉遣いや言い回し自体は、同じ手段を扱った他の資料から借用したものです。ただ文章がとても長く、話の流れが失われるので全部は使わず、言い回しだけ残しました。秘密警察の捜査員はこちらの想像を超える事柄を実務的な表現を使って記述していましたが、そういう文章を読むのは大変興味深いものでした。電気ショック療法を悪用した例は実際に存在し、アウグスチン・ナヴラーチルの例を取り上げた「閉じられた診察」という文献もあります（訳注：カトリックの反体制活動家ナヴラーチル「一九二八―一九三三は、一九八〇年代、治療という名目で精神科で様々な虐待を受けた」。

——スルメナの資料は徹底的に調査したのですか？

ええ。ですが困難を極めました。白カルパチアで、天気を操ることのできるスルメナと呼ばれる女性がいるのは知られていました。ですが、誰一人として彼女の本名や誕生日を知らなかったのです。私が役所で人物照合を行った際も、本名と誕生日も不明だったので、誰なのか確認できませんでした。

——外見も分からなかったのですか？

ええ。でも、女神たちは親族同士だったので、比較的似ていたそうです。昔の絵や写真を見る

したが、裏を返せば、女神たちが自分たちを信じるように彼らと接していたからです。もしかしらば、それがあの人たちの最大の技なのかもしれない。つまり、生き方の何かを変えて持病の治療に専念すること、あるいは誰かとの関係を改善するように促すことです。黒魔術を使っていたという一家を調べていたときに、そのような話を耳にしました。私の小説でも、実名を出して実際のことを書きたいという気持ちに駆られました……。ですが、もしそうしていたら、あの人たちに恨まれたでしょう。それに、当時は病氣に罹り、熱が下がらず、どうしたらいいかとしばらく思い悩んでいましたから。結局、実名は出さず、出自も他人には分からないようにして書くこうと決心するやいなや、病氣から回復しました。それで落ち着きました。

——でも、それは亡くなって墓のなかにいる女神が何か力を及ぼしたというより、病氣の際に感じた単なる恐怖心だったのではないですか？

そうかもしれません。コパニツェ、ブルノ、プラハをたえず行ったり来たりして、健康を損なうくらいにこのテーマに取り組み、体に負荷がかかっていた。心因性であったことは確かだと思います。

——女神のことを最初は誰から聞きましたか？

友人の歴史家で民俗学者のダヴィッド・コヴァジクです。情報が尽きることがない泉のような人です。都市部に暮らすようになる前の、両親が離婚した幼少期に暮らしていた農村の環境に舞い戻る必要があると、三年ほど前に彼に

と、皆、背の低い小柄な女性で、地元の民族衣装を着ていたようです。

——主人公ドラの弟ヤコウベクは障害を抱えていますが、彼はこの小説でとても重要な役割を担っています。一方、内容に起伏を与えるため少し表面的に描かれているのではとも思いました。

それなりの理由があります。この小説で、ヤコウベクはアペール症候群を患っています。つまり、精神面でも肉体面でも障害を抱えています

話しました。それに、興味深い運命をたどった女性について調べたいということも。すると彼はすぐにびんと来て、ジートコヴァーの女神のことを教えてくれたのです。

——それで興味に火がついた？

そう、すぐに。でも、その話が現実なのか、はじめは確信がありませんでした。ナチス・ドイツの親衛隊、共産主義者との関係、スルメナ、こういったことすべてを一つずつ確認し、調査し、そのうえでフィクションの要素を足す必要がありました。

——ジートコヴァーの女神について書くこうと決心したのですね。

……でも、物語がどこに向かうかまだわかりませんでした。手始めに、論文、書籍、民族誌の年報などを読み、それから、女神について何か書きたいと思い、このテーマについて何か教えてもらえるものはないかとモラフスケー・コパニツェに出かけました。そこで一軒ずつ訪ねて、ある時、一人の女性教師に遭遇しました。その人が、女神やその子どもたちの家々へと私を案内してくれたんです。

——あなたの小説は、どの程度事実に基づいていますか？

振り返ってみると、具体的に言うのは難しいですが、あえていえば七割以上は実際の資料に基づいています。

——作中では語り手の伯母であるスルメナが秘密警察に連行され、その詳細を記した書類が引用されます。スルメナの資料は行方不明です、あるいは他

す。コパニツェでは珍しいことではありませんでした。この人たちはお酒をよく飲んでいて、以前は妊婦がアルコールを飲むことも珍しいことではありませんでした。遅い子が生まれてくるようにと願ったからです。そればかりか、子どもにアルコールを飲ませて寝かしつけることもあったのです。そのため様々な障害が生じることになりました。女神たちは手を打とうとしましたが、あまり効果はありませんでした。

——読者や批評家の評判はどうですか？

『ジートコヴァーの最後の女神たち』は好意的に受け止められています。その前の『ゲルタ・シュニルフの追放』（訳注：二〇〇九年刊行。第二次世界大戦後、チェコから追放されたドイツ系住民を題材にした小説）はそれほどありませんでしたが。

——後者の反応は、スデーテン・ドイツ人の移送というテーマのせいですか？

欲得ずくで書いたのだろうと勘繰る人もいれば、あれは「スデーテン（訳注：チェコの国境地帯かつてはドイツ人が多く居住していた）の連中」のための本で、単に関心を集めたかったから書いたのではという批判もありました。ですが、『女神』の方は、多くの人が好意的に読んでくれました。本を読んだという人からメールが毎日のように届いて、うちの家族にも似たようなことがあったなどと教えてくれるのです。この小説は、普通とは異なる生き方をしていた多くの人に何かを訴えたようです。まさか、女神たちの運命がここまで反響があるものとは思ってもみませんでした。



ジートコヴァーの丘
photograph by Dalibor Gluck



ただいま翻訳中!

今秋以降に刊行を予定している注目の作品を、それぞれの翻訳者の方々にご紹介いただきました。

2018年刊『最初の悪い男』以来、
久々となるミランダ・ジュライの新作長篇や、
ジュンパ・ラヒリの最新作などが刊行されます。

※タイトルはすべて仮題です。

『ライブニッツの七日間』

ミハエル・ケンペ
Die beste aller möglichen Welten: Gottfried Wilhelm Leibniz in seiner Zeit by Michael Kempe

森内薫
text by Moriuchi Kaoru



このところフランス革命と葛屋重三郎にハマっているの
で、何でもそれを基
準に考えてしまう。
マリー・アントワ
ネットは1755
年、葛屋は1750
年の生まれ。本書の主人公ライブニッツ
は1646年生まれだから、1世紀前。
彼が生きていた当時、フランスは太陽王
ルイ14世の時代。革命はまだ100年以上
先だし、啓蒙思想もようやく芽吹いた
ばかり。実際、例のかつらを着用する程
度には昔の人なのだ。でも、本書の彼は
なぜか、それほど古く思えない。なん
ら現代と結構つながっている気さえする。
積分記号「J」を発案し、現代のデジ
タルコードの基本である二進法を確立し
、計算機まで作ろうとする。哲学的な著作
を書き、銀採掘に関わり、身分違いの恋
（たぶん）に落ち、座業で寿命が縮まると
心配する。たった七日の出来事で彼の奇
才ぶりと人間くささを知ることのできる
ユニークな作品です。お楽しみに!

(二〇二六年一月刊行予定)

『名前のないカフェ』

ローベルト・ゼーターラー
Das Café ohne Namen by Robert Seethaler

浅井晶子
text by Asai Shoko



一九六六年、ウィー
ンの街に一軒のカフェ
がひっそり開店した。
お洒落でも高級でもな
い庶民的な店で、主な
客は市場や工場の労働
者たち。失業して空腹のあまり倒れた女
工が担ぎ込まれ、プロレスラーが恋をし
、チーズ商の未亡人とロシア人画家が痴話
げんかする。

本書のタイトルどおり、このカフェには
名前がない。「名前のないカフェ」は「名も
なきカフェ」でもある。戦後の荒廃から立
ち直り、街が目覚ましい発展を始めた時
代は、同時に古き良き店や場所や価値観
が淘汰されていく時代でもあった。『ある
一生』で二十世紀を山で生きた男の生涯
を描いたゼーターラーが、本書では時代か
ら取り残され、歳を取り、いろいろなもの
を失っていく「名もなき」人々を冷徹な
がらも愛情深い眼差しで描写する。

開店から十年で、名もなきカフェは閉
店する。カフェの主人も客たちも、その後
どこへ行ったのだろうか。(二〇二六年春刊行予定)

『ローマ物語』

ジュンパ・ラヒリ
Racconti Romani by Jhumpa Lahiri

中嶋浩郎
text by Nakajima Hiroo



ローマを舞台とする
九つの作品が収められた
『ローマ物語』は、ラヒリ
の短篇集としては三作
目、イタリア語では初の
連作集となる。

タイトルの『ローマ物語』はもちろんア
ルベルト・モラヴィアへのオマージュで、
ラヒリはあるインタビューで「モラヴィア
は私をイタリア文学の世界に導いてくれ
たウエルギリウスのような存在」と語って
いる。一九五四年に出版されたモラヴィア
の『ローマ物語』が戦後復興期のローマを
たくましく生きる庶民を描いていたのに
対し、ラヒリの『ローマ物語』の登場人
物の多くは移民とその子ども、海外駐在
員の妻、サバティカル休暇中の学者など、
外国にルーツをもちながらローマで暮らし
ている人々である。その意味では、アメリ
カのインド系移民を主人公として彼女が
英語で書いた作品とも通じるところがあ
ると言えるだろう。

(二〇二六年夏刊行予定)

『ゾンビになった元カノとの旅』

ローリー・ムーア
I Am Homeless If This Is Not My Home
by Lorrie Moore

榎木玲子
text by Tochigi Reiko



かけがえのない存
在を失ったとき、私
たちはその現実とど
う折り合いをつける
のか。

停職中の高校教師
フィンの元に、不本
意に別れた最愛の元
カノ、リリーの計報
が届いた。だが墓
地を訪れた彼の前に現れたのは、口に泥を
含んだリリーではないか。フィンは戸惑
いながらも彼女の冷たく骨張った手をつ
かんで車に乗り込んだ。世にも不思議な
ロードトリップの始まりである。

家族、生、死、喪失、心のバランス、
底知れぬ悲しみ、そして日常への回帰
——複数の題材に、素つ頓狂で時にダー
クなユーモアが加わって、ほどよく醸成
されたのがこの奇妙で切ない物語だ。サ
ブロットともいえるべき、一九世紀のと
ある女性の手紙／日記が、作品世界にな
んともいえない奥行きをもたらしている。
二〇二三年全米批評家協会賞受賞作。

(二〇二六年春刊行予定)

『這いつくばって』

ミランダ・ジュライ
All Fours by Miranda July

岸本佐知子
text by Kishimoto Sachiko



『最初の悪い男』以来、
九年ぶりに発表されたミ
ランダ・ジュライの長編
小説のテーマは、ずばり「中年の危機」だ。
四十五歳で夫と子供とともにL.Aで暮ら
すアーチストの「わたし」は、臨時収入で得
た二万ドルを元手に、ニューヨークまでの単
独ドライブ旅行を企てる。ところが家から
ほんの三十分のところにある小さな町で理
由もなく高速を降り、ばっとしないモーテ
ルに泊まってしまった彼女ははずるずると宿
泊を重ね、ついには有り金をすべてはたいて
モーテルの部屋を超ゴージャスに改装してし
まう。こうして完成した「自分ひとりの部
屋」で、彼女は夫と子供にはニューヨーク
にいと嘘をつきつつ、年下のダンサー、
デイヴィーと逢瀬を重ねる。

……と、ここまででやっと話の半分、こ
こから彼女の魂の遍歴はさらに変転に変転
を重ね疾走する。発表と同時に「更年期目
前の女性の内面の葛藤と欲望をよくぞここ
まで描いてくれた!」と全米の女性読者か
ら熱狂的に支持された本書は、全米図書賞
最終候補をはじめ、数々の榮譽に輝いている。

(二〇二六年夏刊行予定)



停電の夜に

小川高義訳 2090円 590019-9

ろうそくの灯りの下、秘密の話を——。
ピュリツァー賞ほか独占！インド系女性作家
による驚異のデビュー短編集。もはや古典的名作。

ジュンパ・ラヒリ
Jhumpa Lahiri
アメリカ/イタリア
1967～



© Laura Sisson/Art



朗読者

松永美穂訳 1980円 590018-2

十五歳の少年ミハエルが経験した切ない初恋。
母親のような年の女性ハンナを失跡させた
秘密とは——衝撃の世界的ベストセラー。

ベルンハルト・シュリンク
Bernhard Schlink
ドイツ 1944～



【その他の作品】

夏の嘘 松永美穂訳 2200円 590100-4
階段を下りる女 松永美穂訳 2090円 590139-4
オルガ 松永美穂訳 2200円 590165-3
別れの色彩 松永美穂訳 2310円 590186-8

【その他の作品】

見知らぬ場所
低地
べつの言葉で
わたしのいるところ
思い出すこと
翻訳する私

小川高義訳 2530円 590068-7
小川高義訳 2750円 590110-3
中嶋浩一郎訳 1760円 590120-2
中嶋浩一郎訳 1870円 590159-2
中嶋浩一郎訳 2200円 590190-5
小川高義訳 2145円 590199-8

新潮 Crest・ブックスが
お届けする111タイトルを
ご紹介します。
【価格は税込です】

Shincho Crest Books

Catalog

1998-2025

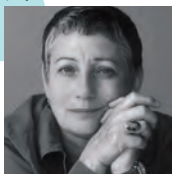


緑の天幕

前田和泉訳 4180円 590177-6

スターリンが死んだ1950年代からソ連崩壊まで。
ロシアを代表する人気作家が、名もなき人々の
抑圧下でのドラマを描いた大河小説。

リュドミラ・ウリツカヤ
Ludmila Ulitskaya
ロシア 1943～



© Ilario Carmina

【その他の作品】

ソーネチカ 沼野善子訳 1760円 590033-5
女が嘘をつくとき 沼野善子訳 1980円 590095-3
子供時代 沼野善子訳 1980円 590118-9
陽気なお葬式 奈倉有里訳 1980円 590124-0



冬の犬

中野恵津子訳 2090円 590037-3

カナダ東端の島で、犬、馬、鷺ら動物とともに、
祖先の声に耳を澄ませながら人生の時を刻む人々。
生の厳しさと美しさを湛えた8篇。

アリステア・マクラウド
Alistair MacLeod
カナダ 1936～2014



© Tim Phipps

【その他の作品】

彼方なる歌に耳を澄ませよ
中野恵津子訳 2420円 590045-8

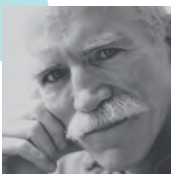


パリ左岸のピアノ工房

村松潔訳 2915円 590027-4

パリの小さな工房で、若き職人が魔法のように
再生する名器の数々……。眠っていた音楽と
ピアノへの愛が甦る傑作ノンフィクション。

T. E. カーハート
Thad E. Carhart
アイルランド/アメリカ
1950～



© S. Newcombe



シェル・コレクター

岩本正恵訳 1980円 590035-9

孤島で静かに暮らす盲目の老貝類学者を襲った
奇妙な騒動を描く表題作ほか、O・ヘンリー賞
受賞作を含む鮮やかなデビュー短編集。

アンソニー・ドーア
Anthony Doerr
アメリカ 1973～



© David M. Phillips

Coming Soon

photograph Pascal Ito ©Flammarion

完璧にはほど遠くとも、 慈しむべき 「我ら」の人生

ヴェロニック・オヴァルデ

『わたしたちの不完全な人生へ』

村松潔訳 2025年12月刊行予定

不運すぎる男、酒に逃げることをやめた女、
ボブと名乗る少女……。
欠けたものを抱えて生きる人々が
交錯する8編の物語。

村松潔・文
text by Muramatsu Kiyoshi



Véronique Ovaldé
À nos vies imparfaites
[2024]



十月のある木曜日、オーギュストは人生のギアを切り換える決心をした。これまではずっとまさに典型的なついでない男で、母親がいきなり出ていってしまったり、父親がエレベーターで事故死したり、友人たちからはオーギュスト・バラカ(幸運のオーギュスト)という皮肉なニックネームを付けられる始末だった。だが、それまでの煮えきらない生活に別れを告げて、孤独な少年時代から培ってきた「録音」という趣味に没頭する暮らしをはじめようと考えたのである。さいわい近所に地下室付きのアパルトマンを見つけたので、不動産屋に連絡して内見にいく、とても静かなところで、まさに録音室をつくるのにちょうどよかった。しかも、建物の前で落ち合った不動産会社の女性はなんだかちょっとすてきな人だった。

彼はすぐに契約する気になったが、その女性はちょっと戸惑ったような顔をして、(契約を急かす多くの不動産屋とは違って)もう一度よく考えてみるように勧めた。じつは、オーギュストは忘れていたが、この日はゼネストで、この物件は地下鉄の路線が交差する上にあり、ラッシュアワーになると、地下室には2分おきに轟音と振動が響きわたるのだった。けれども、いまのところ、彼はそれを知らず、彼女と近いうちにまた会えること、いい場所を見つけたことで有頂天になり、そのほかのことはどうでもよかった。そして、実際、この日は彼の人生の転換点になったのである。

それから数年後、ふたりは自宅の居間の長椅子に手を取り合って坐り、このときのことを話すことになるはずだった。

というのが冒頭の物語で、このほか本作には7編の短編が収められており、それぞれ独立した作品としても読めるが、一つの作品の登場人物が別の作品にも出てきたりするので、微妙なつながりがあり、全体としてひとつの世界を形作っている。これはまさに「わたしたちの不完全な人生」の物語で、華々しいヒーローが出現したり劇的な事件が展開したりするわけではないが、独特な人間味のあるユーモアがにじむ文体とも相俟って、読者はいつの間にかこの懐かしい登場人物たちに愛着をもつようになるだろう。この作品の登場人物のたどる人生の軌跡は決して羨むようなものではないのだが、なぜか読んだあとに、ほんのりとペースソのにじむ人間味のある後味が残る。



帰れない山
山口英子訳 2475円 590153-0

山がすべてを教えてくれた。アルプス山麓を舞台に、
本当の居場所を求めて彷徨う二人の葛藤と
友情を描く、国際的ベストセラー。



【その他の作品】
フォンターネ 山小屋の生活
関口英子訳 1980円 590179-0



イラクサ
小竹由美子訳 3080円 590053-3

一瞬が永遠に変わるさま。長い年月を見通す
まなざし。長篇小説を凝縮したかのような味わいの、
「短篇の女王」による九つの物語。



【その他の作品】
林檎の木の下で 小竹由美子訳 2640円 590058-8
ディア・ライフ 小竹由美子訳 2530円 590106-6
善き女の愛 小竹由美子訳 2640円 590114-1
ジュリエット 小竹由美子訳 2640円 590131-8
ピアノ・レッスン 小竹由美子訳 2750円 590154-7



ペンギンの憂鬱
沼野善子訳 2640円 590041-0

憂鬱症のペンギンと暮らす小説家ヴィクトル。
新聞の死亡記事を書く仕事をきっかけに、
身辺に不可解な出来事が次々と起こって……。



【その他の作品】
土曜日 小山太一訳 2420円 590063-2
初夜 村松潔訳 1870円 590079-3
甘美なる作戦 村松潔訳 2530円 590111-0
未成年 村松潔訳 2090円 590122-6
憂鬱な10か月 村松潔訳 1980円 590147-9

ハイウェイとゴミ溜め ジュノ・ディアス 江口研一訳
2090円 590004-5

ウォーターランド グレアム・スウィフト 真野泰訳
3190円 590029-8

世界の果てのビートルズ ミカエル・ニエミ 岩本正恵訳
2090円 590052-6

新潮クレスト・ブックス 短篇小説ベスト・コレクション
記憶に残っていること 堀江敏幸編 アリス・マンロー他 2090円 590070-0

サラの鍵 タチアナ・ド・ロネ 高見浩訳
2530円 590083-0

オスカー・ワオの短く凄まじい人生
ジュノ・ディアス 都甲幸治・久保尚美訳 2640円 590089-2

アンネ・フランクについて語るときに僕たちの語ること
ネイサン・イングラダー 小竹由美子訳 2090円 590101-1

こうしてお前は彼女にフラれる ジュノ・ディアス 都甲幸治・久保尚美訳
2090円 590103-5

美しい子ども 松家仁之編 ジェンバ・ラヒリ他
2090円 590104-2

いにしへの光 ジョン・バンヴィル 村松潔訳
2310円 590105-9

大いなる不満 セス・フリード 藤井光訳
1980円 590109-7

マリアが語り遺した事 コルム・トビン 榎木伸明訳
1760円 590113-4

ヴォルテール、ただいま参上!
ハンス＝ヨアヒム・シェトリヒ 松永美穂訳 1760円 590117-2

文学会議 セサル・アイラ 柳原孝敬訳
1870円 590121-9

屋根裏の仏さま ジュリー・オオツカ 岩本正恵・小竹由美子訳
1870円 590125-7

誰もいないホテルで ベーター・シュタム 松永美穂訳
1870円 590128-8

四人の交差点 トンミ・キンスネン 古市真由美訳
2420円 590130-1

ウィンドアイ ブライアン・エヴァンソン 柴田元幸訳
2200円 590132-5



ある一生
浅井晶子訳 2035円 590158-5

アルプスの山とともに、20世紀を生きた
名もなき男の生涯がなぜこんなにも胸に迫るのか。
現代オーストリア文学の恩寵に満ちた物語。

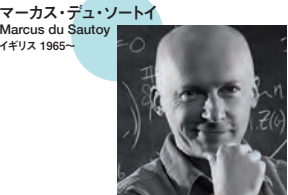


【その他の作品】
野原 浅井晶子訳 2200円 590184-4



数学が見つける近道
富永星訳 2640円 590187-5

麓の山で一本の針を探す——そんな仕事は
コリゴリ。数学者が教える、有意義に時間を使う
数学的「近道」のエッセンス集。



【その他の作品】
知の果てへの旅 富永星訳 3300円 590146-2
レンブランの身震い 富永星訳 2750円 590169-1



アコーディオン弾きの息子
金子奈美訳 3300円 590166-0

幼なじみはなぜ故郷を捨て、アメリカで没したのか。
遺された回想録から浮かび上がる波乱の人生を
描く、バスク語現代文学の傑作。



【その他の作品】
アコーディオン弾きの息子 金子奈美訳 3300円 590166-0



いちばんここに似合う人
岸本佐知子訳 2640円 590085-4

孤独な魂たちが束の間放つ火花を、
切なく鮮やかに写し取った十六の物語。映画監督
としても活躍する著者のオコナー賞受賞作。



【その他の作品】
あなたを選んでくれるもの 岸本佐知子訳 3080円 590119-6
最初の悪い男 岸本佐知子訳 2750円 590150-9



海と山のオムレツ
関口英子訳 2145円 590168-4

食べることはその土地と生きること。
イタリア最南端、カラブリア州出身の作家が、
絶品郷土料理と家族の記憶を綴る自伝的短篇集。



【その他の作品】
風の丘 関口英子訳 2310円 590115-8
ふたつの海のあいだで 関口英子訳 2090円 590135-6



ミッテランの帽子
吉田洋之訳 2255円 590155-4

その帽子を手にした日から、冴えない人生は
美しく輝きはじめる。1980年代のパリを舞台にした、
大人のための幸福なおとぎ話。

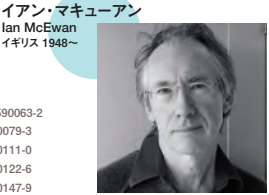


【その他の作品】
赤いモレスキンの女 吉田洋之訳 2145円 590170-7
青いバステル画の男 吉田洋之訳 1870円 590185-1



恋するアダム
村松潔訳 2750円 590171-4

冴えない男と秘密を抱えた美女の間に割り込む
アンドロイド。奇妙な三角関係のゆくえは？
人とAIの文明的衝突を笑い飛ばす傑作。



【その他の作品】
土曜日 小山太一訳 2420円 590063-2
初夜 村松潔訳 1870円 590079-3
甘美なる作戦 村松潔訳 2530円 590111-0
未成年 村松潔訳 2090円 590122-6
憂鬱な10か月 村松潔訳 1980円 590147-9



手紙
奈倉有里訳 2640円 590097-7

戦争に行った若者と残された少女。
ふたりは百年の時を隔ててめぐり会う。死を超えて、
時空を超えて綴られた、瑞々しい愛の手紙。



【その他の作品】
ミハイル・シーシキン Mikhail Shishkin ロシア 1961～



秋
木原善彦訳 2200円 590164-6

およそ百歳の眠り続ける老人。その人生は
EU離脱に揺れるイギリスの戦後史に重なり——
奇想に満ちたポスト・ブレイグジット小説。



【その他の作品】
両方になる 木原善彦訳 2640円 590152-3
冬 木原善彦訳 2530円 590175-2
春 木原善彦訳 2530円 590180-6
夏 木原善彦訳 2750円 590181-3

Shincho Crest Books

Catalog

1998-2025

地上で僕ははつかの間きらくめく オーシャン・ヴオン 木原善彦訳
2420円 590173-8

ウォーターダンサー タナハシ・コーツ 上岡伸雄訳
3080円 590174-5

ハムネット マギー・オファーレル 小竹由美子訳
2750円 590176-9

レニーとマーゴで100歳 マリアンヌ・クローニン 村松潔訳
2750円 590178-3

ホットミルク デボラ・レヴィ 小澤身和美訳
2420円 590182-0

光を灯す男たち エマ・ストーネクス 小川高義訳
2640円 590183-7

ある犬の飼い主の一日 サンダー・コラルト 長山さき訳
2145円 590188-2

ルクレティアの肖像 マギー・オファーレル 小竹由美子訳
3080円 590189-9

ミケランジェロの焔
コスタンティーノ・ドラッツィオ 上野真弓訳 2365円 590191-2

この村にとどまる マルコ・バルツァーノ 関口英子訳
2365円 590192-9

あなたの迷宮のなかへ カフカへの失われた愛の手紙
マリ=フィリップ・ジョンシュレー 村松潔訳 2640円 590193-6

ハルビン キム・ファン 蓮池薫訳
2365円 590194-3

スイマーズ ジュリー・オオツカ 小竹由美子訳
2035円 590195-0

ピアノを尋ねて クオ・チャンシェン 倉本知明訳
2145円 590196-7

わたしの人生 ダーチャ・マライーニ 望月紀子訳
2145円 590197-4

モナ・リザのニスを剥ぐ ボール・サン・プリス 吉田洋之訳
2640円 590198-1

わたしがナチスに首をはねられるまで ミリアム・ルロワ 村松潔訳
2530円 590200-1

遺された者たちへ マッテオ・B・ピアンキ 関口英子訳
2420円 590201-8

ビリー・リンの永遠の一日 ベン・ファウンテン 上岡伸雄訳
2530円 590134-9

人生の段階 ジュリアン・バーンズ 土屋政雄訳
1760円 590136-3

おじいさんに聞いた話 トーン・テレヘン 長山さき訳
1980円 590140-0

運命と復讐 ローレン・クロフ 光野多恵子訳
2970円 590141-7

ノーラ・ウェブスター コルム・トビン 榎木伸明訳
2640円 590142-4

ファミリー・ライフ アキール・シャルマ 小野正嗣訳
1980円 590143-1

昏い水 マーガレット・ドラブル 武藤浩史訳
2530円 590144-8

マザリング・サンデー グレアム・スウィフト 真野泰訳
2145円 590145-5

ガルヴェイアスの犬 ジョゼ・ルイス・ベインショット 木下真穂訳
2640円 590149-3

変わったタイプ トム・ハンクス 小川高義訳
2640円 590151-6

波 ソナーリ・デラニヤガラ 佐藤澄子訳
2200円 590156-1

トリック エマヌエル・ベルクマン 浅井晶子訳
2750円 590157-8

ケミストリー ウェイク・ワン 小竹由美子訳
2200円 590160-8

靴ひも ドメニコ・スタルノーネ 関口英子訳
2090円 590161-5

西への出口 モーシン・ハミッド 藤井光訳
1980円 590162-2

友だち シーグリッド・ヌーネス 村松潔訳
2200円 590163-9

サブリーナとコリーナ カリ・ファハルド=アンスタイン 小竹由美子訳
2310円 590167-7

身内のよんどころない事情により ベーター・テリン 長山さき訳
2255円 590172-1